

附属幼稚園の音響空間を生かした音楽活動の実践 —音への興味を促し楽器遊びへと繋げるために—

麓 洋介* 水谷 幸子**

*幼児教育講座

**附属幼稚園

Practicing Music Activities that Make the Most of the Acoustic Space — For Arouse Interest in Sound and Lead to Play with Musical Instruments —

Yohsuke FUMOTO* and Sachiko MIZUTANI**

*Department of Early Childhood Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Kindergarten, Nagoya 461-0047, Japan

Keywords：施設環境 音響空間 楽器遊び

はじめに

愛知教育大学附属幼稚園（以下、附属幼稚園）では、令和3年度に園舎の改修工事が行われ、ウッドデッキに変わった通称「みどりの広場」は従来の名称そのままに引き継がれ、天上（上部）には大きな屋根が新たに付けられた。

筆者らはこのウッドデッキの音響の良さに着目し、音楽活動用のステージとして保育における音楽表現遊びに繋げることを計画した。

I ウッドデッキのステージ

園舎の改修工事に伴い西側にも園舎が新設されたことで、従来の北舎、南舎と合わせて逆コの字を描く建物の配置となっている。その内側は主に3歳児が遊ぶ小園庭（中庭）があり、コの字の付け根の部分はウッドデッキが敷かれている。ウッドデッキの上には日除け用の屋根が付けられており、園児たちが雨の日でも遊ぶことができるようになっている。他、ステージとして様々な音楽活動での使用も可能になっている。各保育室には中庭に面して出入り口が設けられており、園児たちは靴を履き替えることなくステージに出ることができる。ウッドデッキは板敷きで、下に少

し空間があり音が響く。またステージ上の屋根はドーム型の形状となっており、3方を建物で囲まれていることで生じる反響音が心地よく響き、また適度に残響が残る作りとなっている（図1、図2）。



図1 ステージの様子



図2 ステージからの眺め

II 幼稚園の音響空間を活かした音楽遊び

本研究を進めるに当たり、2022年5月に筆者らと附属幼稚園の園長および各クラスの担任教諭と話し合いを行った。話し合いに際して予め普段の音楽活動とどのような音楽的体験を子どもたちにさせたいか担任教諭にアンケート調査し、それを基に具体的計画を立案した。

附属幼稚園では、秋の運動会後の11~12月にかけて楽器遊びが各クラスにおいて盛んになる。そこで本研究ではそのための導入として、「日常生活の中で子どもが身の周りの音に気付き、音楽を感じる環境を作る」ことを目的とした。

Ⅲ 園児が楽器や音に興味を持つための お楽しみ会

「みどりの広場」ウッドデッキのステージでの実践を行う前に、園児たちが楽器や音に興味を持つようにすることを目的として学年ごとにお楽しみ会を実施した。

1 年長児を対象とした楽器紹介

年長児を対象に、幼児曲「やまのおんがくか」を用いて、筆者が歌いながら様々な楽器を紹介した。用いた楽器は鈴、タンバリン、トライアングル、ウッドブロックといった附属幼稚園にもあり園児に馴染みのある楽器から、カホン、フィンガーシンバル、ヴィブラスラップ、グロッケン、ミュージックホースなど園児たちにとって珍しい楽器など様々に用意した。

お楽しみ会を始める前に、園児たちには音を注意深く「聴く」ことを促し、楽器を紹介する際には、同じ楽器でも奏法によっていろいろな音がすることに気付くよう意識して関わらせた。

2 年中・年少児を対象とした楽器紹介

年中・年少児を対象として、楽器紹介を行った。年中・年中クラスの担任教諭と筆者により「はらぺこあおむし」の楽曲を使用した歌い聞かせを行った。担任教諭が大型絵本を見せながら歌とピアノを担当し、筆者が曲に合わせて様々な楽器の音色を聴かせることで楽器を紹介した。

Ⅳ ウッドデッキのステージを使った 楽器遊びの実践

(1) **内容**：ウッドデッキを利用した楽器遊びの実践

(2) **概要**：附属幼稚園のウッドデッキに楽器遊びコーナーを設置し、反響する空間を生かして子どもに音の響きを意識して聴くことを促し、自由に音を鳴らすことを楽しむようにする。また子どもが興味を持てるように様々な楽器を用いて実演する。

(3) 目的：

- ① 屋外で音を鳴らして楽しむ
- ② 建物の屋根や壁に反響する音に気付く
- ③ いろいろな楽器を自由に音を鳴らして楽しむ
- ④ 楽器の鳴らし方によって音の響きが変わることに気付く
- ⑤ いろいろな音の重なるの面白さに気付く

園児への働きかけとして、ウッドデッキのステージにおける特性を利用して様々な音の変化への気付きと自由に音を探求する楽しさを感じられるようにすることを主な目的とした。

実施日時：令和4年6月29日、7月6日の2日間 登園後の好きな遊びの時間（8：45～10：30頃）に実施した。

(4) 使用楽器：

鈴、カスタネット、ウッドブロック、シェーカー、太鼓（小）トライアングル、テーブルコンガ、トーンチャイム、ヴィブラスラップ、カホン、フィンガーシンバル、フレクサトーン（6月29日）

鈴、ウッドブロック、シェーカー、太鼓（小）、フロアタム（大・中・小）、マレット等（7月6日）

6月29日

朝の好きな遊びの時間に実施した。登園する園児たちを前にウッドデッキのステージ上で楽器を並べ、筆者がトーンチャイムを鳴らして実演した。トーンチャイムを選択したのは音色が優しく余韻が長く残るため、園児たちが響きを聴きやすいと思われたためである。

筆者がステージで歩きながら音を響かせていると、10名ほどの園児（年中児）が興味を示しやって来た。そこで音を注意深く聴くこと、楽器の持ち方と鳴らし方や鳴らす場所によって音の響きが変わることを伝え、順番に楽器を鳴らすように一つ一つ手

渡した。園児たちはステージ上を自由に歩きながら思い思いに楽器を鳴らし、余韻を聴いていた。それを見てさらに園児が集まって来たため、ウッドブロック、鈴、フロアタム、テーブルコンガ、カホン、シェーカー、トライアングルを出して園児たちが自由に楽器を鳴らせるようにした。

初めのうち、園児たちは楽器の珍しさもあって様々な鳴らし方（楽器を足で鳴らす等も含めて）で思い切り音を鳴らして試していた。そうしたある種の集団的興奮状態が一通り収まると、自分の好きな楽器を集めて順番に鳴らしたり、友達同士や教諭と一緒に鳴らしたりして楽しむ様子が見られた。楽器の大きさの違いによって音の高さが変わることに関心、大小のフロアタムを組み合わせる演奏する姿も見られた。

A児（年中児）が、自分のクラスからカスタネットを持って来て筆者に鳴らして聴かせた。筆者がそれに応えるようにカホンで園児のリズムを模倣すると、楽器の会話が交互にしばらく続いた。

初めは筆者にカスタネットを鳴らして聴かせていたが、筆者がそれに答える代わりにリズムを模倣した。A児がまた短いリズムを返したのをさらに筆者が模倣すると、A児は今度はリズムを変え、筆者と2人の即興のアンサンブルへと展開した。

7月6日

朝の好きな遊びの時間に実施した。前回は余韻が響く楽器を中心に多種多様な楽器を用意したのに対して、この日はドラム類とウッドブロック、シェーカー、鈴のみに限定してステージに用意した。

筆者が楽器をステージに並べていると、

早速7名の園児（年中児）たちがやって来て楽器を鳴らし始めた。前回と異なる点として、楽器の奏法等について筆者に尋ねることなく、自分の好きな楽器を並べてすぐに鳴らし始めたことである。一通り鳴らした後4名の園児は他の遊びに行ってしまったが、残った3名はそれぞれ異なる方法で音を探求する様子が見られた。B児は、楽器を強く叩いたり弱く叩いたりし、叩き方による音の違いを楽しんでいた。C児は、大きさの異なるフロアタムを3つ並べ、音の高さを確かめるように順番に鳴らしていた。D児は、ミニボンゴを両手に持ったマレットで激しく叩いていたが、床（ウッドデッキ）をマレットで鳴らしてみたり2本のマレット同士を打ち鳴らす様子が見られた。その後、C児がD児にフロアタムの音の違いを聴かせたり、C児の演奏するフロアタムのリズムにD児がミニボンゴで加わってアンサンブルを楽しむ様子が見られた。

前回では、園児たちは珍しい楽器に集まり、また奏法を筆者に尋ねることが多く見られたため一箇所に固まりがちであった。また楽器の鳴らし方もとりあえず力一杯に鳴らす様子が多く見られた。それに対して、今回は始めから自分の好きな楽器を選んで様々な奏法やそれによる音色の変化を注意深く聴く様子が印象的であった。また、前回筆者がA児と行ったような互いの音を聴きながらのアンサンブル的な遊びが見られたことでも、園児たちの音に対する関心が増えたと考えられた。

4名の園児（年長児）が、自分のクラスからカセットデッキ、ベル、シンバルを持って来た。次々に筆者に演奏を聴かせる中、E児はシンバルを勢い良く鳴らしていたが、やがて持ち手の先を持って楽器をぶ

ら下げ、そっと左右の端と端を打ち合わせる奏法に気が付き、音色の違いを楽しんでいた。その後、鳴らしたシンバルを左右の耳に当てて余韻を聴く様子が見られた。

前回にもクラスから楽器を持ってくる様子が見られたが、E児はウッドデッキのステージの残響音に気が付き、筆者に聴かせるための鳴らし方から自分で音の探究をするための鳴らし方へと変化したと考えられた。



図3 C児とD児のアンサンブル (左)



図4 担任教諭に楽器の奏法を尋ねる園児たち (右)

V まとめ

楽器遊びや歌遊びなどの音楽表現活動を行う上で、最も大切なことは、子どもに“聴くこと”を教えることである。音の聴き方を知ることによって、子どもたちは今自分がどんな音や声を出しているか、また自分の周りでどんな音がするかに興味を持ち、聴覚を通して世界を理解するようになる。そのためには、屋外の広い空間でじっと音に耳を傾けられる環境と、音の残響や反響に気が付き子どもたちが“音の聴き方”に気付くよう働きかけることが重要である。本研究においても、子どもたちは始め、まずは自分の興味のまま時にはやや乱暴に楽器を鳴らしていた。しかし音が天井や建物の壁に反響し、余韻が静かに残ることに気付くと、一音一音丁寧に鳴らしてじっと聴き入る姿が見られた。みどりの広場に敷かれたウッドデッキと、そこを囲む空間の音響効果を生かして活動を設定することにより、そのような園児たちの姿を引き出すことができたと考えられた。また、屋外の広い空間は音が適度に散るため、園児がじっくり音の探究を楽しむにも適していた。

担任教諭による園児たちへの働きかけについても述べておきたい。活動の中で、園児たちは筆者らや担任教諭へ様々な質問を投げかけたり、自らの発見した音を聴かせたりした。それに対して担任教諭が園児に分かりやすく説明するだけでなく、楽器を持って実演することによって園児の新しい発見や更なる探究を促すことへと繋がる様子が見られた。加えて、年中・年少児を対象とした楽器紹介において行った担任教諭らによる歌と演奏の実演も、園児たちの音や楽器への興味を持つきっかけになったと考えられる。身近な先生が楽しく歌ったり演奏したりする姿は園児たちにとっての憧れであり、自分もやりたいという動機付けに繋がる。

今回は6～7月にかけて実践を行ったが、園児たちの興味を繋げ遊びを広げていけるよう、今後も附属幼稚園と幼児教育講座との連携を継続していきたい。このような活動が特別なものでなく日常的になることも、園児たちに音や楽器への興味を促すための重要な環境の一つであると言える。

